

(別紙様式10)

2021年度 北極域研究共同推進拠点 共同研究等報告書

【申請区分】: 萌芽的異分野連携共同研究 共同推進研究
産学官連携フュージビリティ・スタディ
共同研究集会 産学官連携課題設定集会

【研究課題名】:人間と自然の交流の位相をどのように捉えるか:キリスト教、世俗/近代、イヌイット社会

【研究期間】:2021 年度

【共同研究員】

共同研究員	氏名	所属・職名	専門分野	区分
研究代表者 (拠点外) (注2)	高橋美野梨	北海学園大学・准教授	政治学	
研究分担者 (拠点外) (注2)	小澤実	立教大学・教授	歴史学	
	中園成生	平戸市生月町博物館・島の館学芸員(平戸市役所文化交流課・参事)	民俗学	
	中丸禎子	東京理科大学・准教授	文学	
	林直孝	北海道大学・海外研究員(カルガリー大学・准教授)	生態人類学	
研究分担者 (拠点内) (注2)	的場澄人	北海道大学・助教	雪氷学	
研究協力者 (注2) (注3)	須藤孝也	立教大学・兼任講師	哲学、宗教学	
	成川岳大	立教大学・兼任講師	北欧中近世史	
	本多俊和	放送大学・元教授	文化人類学	
	ムスリン・イーリヤ	日本大学・研究員	宗教学	
	ソアン・ルド	コペンハーゲン大学・准教授	歴史学	
	ウルリック・プラム・ガド	デンマーク国際問題研究所・上席研究員	政治学	

(注2) 拠点内外については、募集要項別添の北極域研究共同推進拠点を形成する3研究施設の研究者リストをご覧ください。

(注3) 計画申請書に含まれていなかった方でも結果的に本共同研究に参画された方(招へい者等)が居られれば、研究協力者として記述して下さい。

【研究の内容】

(1) 概要を 400 字以内(文字のみ)で記載してください。

本プロジェクトの目的は、シベリアからグリーンランドへ＝西から東へと広がったイヌイットと、キリスト教宣教および交易拠点の形成を目的に東から西への展開を見せたノース人とがく合流する場として歴史を紡いできたデンマーク領グリーンランドのイヌイット社会における人間―自然関係の動性を、広く人文社会科学のディシプリンを跨ぎつつ明らかにすることにある。その際に、先行研究において断片的に指摘されながらも、十分に検討されることがなかった、①キリスト教への習合、②近代化/世俗化、③イヌイット社会における長老の文化社会的機能という、主に 3 つの要素の相関に着目している。なお、共同研究の成果は、広く社会に還元することを目的に、2022 年度中に一般書として出版することが決定している。

(2) 図表や写真も交えて、研究の内容や成果等を 2000 字程度でまとめてください。

グリーンランドにおける人間―自然関係は、イヌイットの世界観に基づき互酬的(共生的)なものであるといわれてきた。しかし同時に、キリスト教化によって自然を功利(合理)主義的に理解しようとする思考が深い深度で根付いていることも指摘されてきた。それは同一の遺伝子ルーツを持つ極北カナダやアラスカのイヌイット社会にはない特質であると、先行研究で指摘されてきた(Arne Kalland and Frank Sejersen (eds.) (2005). *Marine Mammals and Northern Cultures*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press.)。しかし、その生成過程の解法を探求する積み上げは、世界的にもほとんどなされてこなかった。本プロジェクトは、グリーンランド・イヌイット社会における互酬と功利の混濁はなぜ醸成されたかを問うものである。その際に、先行研究において断片的に指摘されながらも、十分に検討されることがなかった、①キリスト教的思想とのく習合>および教派の違いによる影響、②世俗/近代、③イヌイット社会における長老の文化社会的機能の 3 点およびそれらの間の相関を学際的なアプローチから丹念に検討し、間接証拠を交えながら事実を積み上げていくことで、当該地域の人間―自然関係の解法を探求することを目指すものである。共同研究の成果は、広く社会に還元することを目的に、2022 年度中に一般書として出版することが決定している。構成は以下の通りである。

はじめに: 論点整理と本書の趣旨(高橋美野梨)

第 1 章: 人間と自然の交流の位相をどのように捉えるか(高橋美野梨)

【総論】

第 2 章: タイム・トラベル―グリーンランドの時間、空間、文化(ソアン・ルド/Søren Rud)

第 3 章: グリーンランド・イヌイット社会における生業活動 儀礼の衰退―その歴史的・政治的背景をたどる(本多俊和)

【各論】

第 4 章: 中世グリーンランドのルーン碑文・異文化接触・気候変動(小澤実)

第 5 章: ハンス・エゲデ、対サーミ/イヌイット宣教(成川岳大)

第 6 章: キリスト教(プロテスタンティズム)と土着宗教―宗教と政治・社会(須藤孝也)

第7章:人魚、クジラー文学表象としての人間と自然(中丸禎子)

第8章:グリーンランド、フェロー諸島、デンマーク—統一体か、共同体か(ウルリック・プラム・ガド／Ulrik Pram Gad)

第9章:近代日本への視線—互酬的社会としての日本～信仰、捕鯨(中園成生)

おわりに:グリーンランド・イヌイットの現在地(高橋美野梨、ムスリン・イーリャ)

本プロジェクトの意義は少なくとも2点ある。一点目は、デンマーク領グリーンランドのイヌイット社会における人間—自然関係の解法を学際的に探究するという本申請プロジェクトの全体テーマが、先行研究が極めて少ない状況にあること、それゆえに、本プロジェクトには、そうしたミッシングリンクを埋める学術的意義が見出せることである。また、何事も分類したがるアカデミアにあって、北極研究の対象となってきたグリーンランドと北欧研究を構成してきたデンマークは、長きにわたりそれぞれの「所属先」を持ち、その往還は驚くほどに見られなかった。本プロジェクトを通して、こうした既存の枠組みを相対化し、さらに創発を生み出すことを目指すものである。

二点目は、互酬的世界観と功利主義的価値観とが他のイヌイット社会に比して深い深度で混淆していると先行研究で指摘されるグリーンランド社会の探究が(たとえば Kalland and Sejersen eds. (2005). *Marine Mammals and Northern Cultures*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press.)、近年、クリフォード(James Clifford)等の人類学者が牽引する先住民の「節合」と「生成」の局面、つまり、「生き方の残滓を適応させ、組み合わせをしながら」(＝節合)と「深く根付いた適応可能な伝統の数々を過去から選択的に取り出し、複雑なポストモダニティのなかで新しい生き方を創造」(＝生成)という先住民の現在地を捉えようとする議論に、事例の積み上げをもって貢献し得る点である(ジェイムズ・クリフォード『リターンズ 二十一世紀に先住民になること』みすず書房、2020年、p.8.)。本プロジェクトは、グリーンランド／デンマークの事例研究を起点に、そこから広く先住民研究のトレンドと接続する汎用性をもつものである。

第7回(通算11回)研究会をハイブリッド形式で開催した(2022年1月8～9日)



(3) 本共同研究に関する活動・実績等を下表に記入してください。

①研究打合せ、学会参加・集会(注4)、調査等

(注4) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者によるもの

日程(月日)	日数	活動内容	場所	研究代表者、共同研究分担者、研究	参加者数
--------	----	------	----	------------------	------

	(日)			協力者、招へい者の参加者名・部署	(人)
2021.5.9	1	第 1 回(通算 5 回)研究会 ※研究会は 2021.2.14, 3.19, 26, 28 と 2020 年度から 開始された。「通算」 と明記したのはその ためである。	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、林直孝、須藤孝也、成川岳大、 本多俊和、ムスリン・イーリヤ	9
2021.7.24	1	第 2 回(通算 6 回)研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、林直孝、須藤孝也、成川岳大、 本多俊和、ムスリン・イーリヤ	9
2021.8.24	1	第 3 回(通算 7 回)研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、林直孝、須藤孝也、成川岳大、 本多俊和、ムスリン・イーリヤ	9
2021.9.17	1	第 4 回(通算 8 回)研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、林直孝、須藤孝也、成川岳大、 本多俊和、ムスリン・イーリヤ	9
2021.10.31	1	第 5 回(通算 9 回)研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、須藤孝也、成川岳大、本多俊 和、ムスリン・イーリヤ	8
2021.12.5	1	第 6 回(通算 10 回)研究会	Zoom	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、須藤孝也、成川岳大、本多俊 和、ムスリン・イーリヤ	8
2022.1.8-9	2	第 7 回(通算 11 回)研究会	ハイ ブリッ ド	高橋美野梨、小澤実、中園成生、中丸 禎子、須藤孝也、成川岳大、本多俊和	7

②研究論文

研究代表者並びに、研究分担者あるいは研究協力者が著者の関連論文がありましたら可能な限り記載ください。

論文が複数ある場合は、そのフォーマットとして論文 1 の分をコピーして記載してください。

論文 1

項目	記入要項	回答
(1)著者名(共著者名含む)、 発行年、論文タイトル、掲載 誌名、巻・号、ページ数、		

DOI、出版年月日	
-----------	--

② 研究書等著書

著書名・著者名	出版年月	出版社名
なし		

③ 特許等出願

特許、実用新案、商標
なし

④ 研究発表(資料添付も可)

発表年月日	発表者名(共著者を含む)	発表タイトル	発表学会等名称	発表地	招待講演(○)
なし					

⑤ 国際シンポジウム等(資料添付も可)

参加をした主な国際シンポジウム等		
開催時期(年月)	国際シンポジウム等名称	招待講演/議長の有無
なし		

⑦本共同研究に関し実施(主催、共催、後援等)したシンポジウム・集会(注6)等(資料添付も可)

(注6) 研究代表者、共同研究分担者、研究協力者、招へい者以外を含む参加募集によるもの

開催日	実施地 (国、県、市など)	形態 (注7)	シンポジウム・集会等名称	目的及び概要	対象者 (注7)	参加人数 (海外(注8))
なし						

(注7)

形態:シンポジウム、セミナー、公開講座、ワークショップ、その他

対象:一般、地域、学生、研究者

(注8) 海外機関に所属するもの

⑧本拠点共同研究に係る成果が科学研究費などの外部資金の応募(予定を含む)やプロジェクトに

発展した例があればご記入ください。

<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト名 ・代表者・関係者(所属) ・関係研究者 ・予定の場合は、(予定)と記載してください 	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトの主な財源 ・金額 	プロジェクト期間	<ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト概要 (目的・期待効果、規模、参加国等) ・これまでの本共同研究との関連性 (300字程度)
なし			

⑨研究成果が一般社会産業界などに還元(応用)された事例や新しい研究分野の開拓や教育活動に反映された事例(資料添付も可)

なし

⑩その他国際研究協力活動事例

事業名	概要	受入人数	派遣人数
なし			

⑪学会賞等受賞、アウトリーチ、取材、その他

年月日	所在・出典・新聞名等	受賞者・関係者(所属)	研究課題名・賞名・内容等
なし			

記事コピー等を添付してください。

⑫コロナ禍の影響と対策

本共同研究へのコロナ禍の影響と対策(改善・代替策、計画変更、工夫等)、助成金執行率(%)について記述してください。

影響の事象	対策の有無と内容 (計画変更・中止、改善・代替策、工夫等)
特になし	コロナ禍の影響は想定内であり、国内でできることを粛々に行った。計画通り、ハイブリッド研究会を札幌で開催できたことはプロジェクトの進展という意味でも大きかった。